

監修

新村 出
山岸 德平

高木市之助
小島 吉雄

久松 潜一

新古今和歌集

小島吉雄校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

小島吉雄（こじまよしを）

明治三十四年大阪府生。大正十五年京都大學國文學科卒業。九州大學教授、大阪大學教授を経て現在大阪大學名譽教授。主著―新古今和歌集の研究、同續篇、新古今集講話、金槐和歌集等。

日本古典全書

「新古今和歌集」 小島吉雄校註

昭和三十四年六月十五月初版發行

昭和四十二年二月二十日第六版發行

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉區砂津・名古屋市

中區榮）

定價 五〇〇圓

目次

解説

成立と撰集過程	三
集の内容と編纂上の特色	七
傳本	二
新古今歌風とその特色	二四
研究史概略	二九
<small>附、研究書と註釋書</small>	
本書頭註所引本略號解説	三六

凡例	三九
----	----

目次

本文

假名序	四
卷第一 春歌上	四
卷第三 春歌下	六
卷第三 夏歌	七
卷第四 秋歌上	九
卷第五 秋歌下	一三
卷第六 冬歌	一四〇
卷第七 賀歌	一六六
卷第八 哀傷歌	一七六
卷第九 離別歌	一九九
卷第十 羈旅歌	二〇七
卷第十一 戀歌一	二三四
卷第十二 戀歌二	二四〇

卷第十三	戀歌三	二五二
卷第十四	戀歌四	二六七
卷第十五	戀歌五	二八四
卷第十六	雜歌 <small>さいものうた</small> 上	三〇一
卷第十七	雜歌中	三三三
卷第十八	雜歌下	三四九
卷第十九	神祇 <small>じんまゐ</small> 歌 <small>うた</small>	三七八
卷第二十	釋教 <small>しゃくけう</small> 歌 <small>うた</small>	三九三
眞名序		四〇四
底本奥書		四〇七
〔附一〕新古今和歌集隱岐御選抄本御跋文		四一一
〔附二〕底本奥書所載以外の諸本出入歌		四二三

新古今和歌集

小島吉雄

解 説

成立と撰集過程

新古今和歌集は、略して新古今集とも言はれ、後鳥羽上皇の院宣によつて撰集せられた第八番目の勅撰和歌集である。いま、その撰集過程を述べると、大略次のとおりである。

建久九年(西曆一二九八年)正月十一日、後鳥羽天皇は御位を皇太子爲仁親王に譲り、上皇におなりあそばされた。上皇になつてから和歌をはじめられた。今日残つてゐる上皇の御歌は、正治二年(西曆一二〇〇年)の春頃からのものであるが、その正治二年八月には百首歌の御催しがあり、その頃から次第に後鳥羽上皇中心の歌壇が形成せられて行つた。新古今集は、すなはち後鳥羽上皇を中心とする歌壇の産物だつたのである。

建仁元年(西曆一二〇一年)六月には、千五百番歌合百首の御催しがあつた。そして、その七月二十七日に和歌所わかとどころを上皇御所の中に設置せられた。この和歌所の設置は、結果的に見て勅撰和歌集編纂の準備工

作であつた。和歌所に奉仕する歌人を寄人よりうどといふ。寄人は、最初は藤原良經よしつね・源通親みちちか・天台座主慈圓じまん・藤原俊成としなり・源通具みちとも・藤原有家ありへ・同定家またいへ・同家隆いへたか・同雅經またつね・源具親ともちか・僧寂蓮じやくれんの十一人であつたが、後に藤原隆信たかのぶ・鴨長明かものちやうめい・藤原秀能ひでよしの三人を加へて十四人に増員せられた。また寄人のほかに開闔かいわんといふのを置いて庶務を總括せしめられた。これは今日いふ所の主事に當る。開闔には源家長が選出せられた。さて、その年の十一月三日に寄人の中での中堅六人に對して上古以來の和歌を選んで奉獻するやうにとの院宣が下された。六人とは通具・有家・定家・家隆・雅經・寂蓮である。和歌集勅撰の事業がここに緒についたわけである。寂蓮の年齢は今よく分らないが、その時、有家は四十七歳、家隆四十四歳、定家四十歳、雅經三十二歳、通具三十一歳、後鳥羽上皇は御年二十二歳であらせられた。

新古今集の撰集事業は四期に分たれる。第一期は撰者の選歌時代、第二期は後鳥羽上皇の勅選時代、第三期は部類時代、第四期は切り繼ぎ時代である。即ち、建仁元年十一月三日に院宣を蒙つて以來、約一年五ヶ月の間が撰者の選歌時代である。さきに擧げた六人がそれぞれ別箇に選歌をしたのであるが、その中、寂蓮は建仁二年七月に卒去したから、實際にこの御企てに参加して選歌を上進したのは、他の五人だけであつた。この人たちは建仁三年四月二十日頃に相前後して選歌を上進した。この選歌上進の五人が所謂新古今和歌集の撰者と言はれ、その序文にもその名が載せられてゐるのである。

ところで、この撰者が別々に奉獻した選歌を後鳥羽上皇が觀覽あつて、その中から御意に召した歌を約

二千首お選び出しになつた。但し、その二千首の中には選者の選進歌でなく、上皇御自身が新しくお選び出しになつた歌も若干入つてゐる。上皇の勅選時代は約一年間であるが、この間、上皇は萬事を放擲してこれに専念あそばされ、つひには御選歌全部を暗記あそばされてゐるといふ御熱心さであつた。上皇の御選歌は元久元年（西曆一二〇四年）六月中旬までに終つて、七月二十二日には五人の撰者を和歌所に召集せられ、上皇御選出の歌を部類せしめられることになつた。部類といふのは、全部の歌を四季・戀・雜等に分類して、更にそれぞれの歌を適當に排列することである。七月二十七日から本格的な部類事務が開始せられ、爾來七ヶ月、時には人手が足りないから、具親・秀能等の若手の寄人もこれに應援して、元久二年（西曆一二〇五年）三月五日に漸く部類が終り、目錄も出來た。翌六日に部類歌と略目錄とを上皇に奏覽した。新古今和歌集の原形が、ここにひとまづ出來あがつたのである。昭和三十四年より逆算して七百五十五年の昔である。この前年に東ローマ帝國が敗亡し、この翌年に成吉思汗の蒙古建國があつた。

かくて、新古今集は一往出來上つたのであるが、その體裁においても、その内容においても、上皇の御意に滿たぬ點が多々あつて、早速、改修に着手あそばされた。歌の入れかへが主であつたが、中には部類がへをさせられた歌もあり、詞書その他に於ける誤謬の訂正もあつた。この改修事業を切り継ぎといふ。切り継ぎは三月十日から始まつてゐる。切り継ぎといふのは、その當時に用ゐられた言葉であるが、當時の歌集は卷物の體裁であつて、歌を入れかへるにはその部分の紙を切つて継ぎ直さねばならぬから、切り

繼ぎと言つたものであらう。三月二十六日夜更けて新古今和歌集^{きやうえん}竟宴が行はれた。これは歌集の出来あがつた披露の祝宴であるが、前例のないことであつた。後鳥羽上皇の特別の思召^{おぼせ}召して行はれたのである。新古今集の序文では、この竟宴の日をもつて新古今集成立の日としてゐるが、事實は、この時はまだ未完成の状態であつて、當日は序文なしの本を使用し、本文の清書もまだ行はれてゐなかつた。改修途上での披露宴といふわけで、この日をもつて事實上の成立といふことは出来ない。改修事業は、竟宴後も長く續けられた。今日わかつてゐるところでは、承元四年^{じやうげん}（西曆一二一〇年）九月まで足掛け六年にわたつてゐる。源家長が建保四年十二月に和歌所で書寫した本の奥書に「みなさだまりて後この清書はして侍れば御本にいささかもかはるところあるまじ」と記されてゐるのから推察すると、新古今集は承元四年十月以降建保四年（西曆一二一六年）頃までの間に一往の定着を見たらしいのである。そして、その定着させられた時の總歌數は千九百七十八首であつた。

新古今集には國文で書かれた序文と漢文で書かれた序文とがあるが、漢文の序文は所謂眞名序^{まな}で、これは當時の儒學者中の長老たる日野親經^{ちかつね}が執筆し、元久二年二月二十一日に奏覽せられてゐる。國文の序文即ち假名序は、時の攝政太政大臣たる藤原良經が書いた。元久二年三月末の執筆である。

さて、その後、後鳥羽上皇には、北條氏討伐の御企てのために暫く和歌から遠ざかられ、また承久^{じやうきゆう}の變ののちは隱岐御遷幸のことがあつて、新古今集を改修するといふやうなこともおのづから跡絶^とえたのであ

るが、隱岐に遷らせられてのち數年を経て再び和歌に大御心を寄せさせ給ひ、新古今集の再改修に御着手あそばされ、所謂新古今和歌集隱岐御選抄本をお作りになつた。嘉禎元年か同二年ごろのことである。嘉禎元年は丁度西曆一二三五年に當る。隱岐御選抄本は、全體の體裁を變へないで、ただ所收歌數を減らして精撰を期せられたものである。除き棄てられた歌が約三百七十首あまり、殘された歌が約千六百首と推算せられる。これには、また御選抄の趣意をしるした御跋文を附屬せしめられた。

後鳥羽上皇は、この隱岐御選抄本をお作りになつてから四年ほど經て、延應元年(西曆一二三九年)二月二十二日隱岐において崩御あそばされた。實算六十。上皇がこのやうにその御生涯の大半を新古今集と共にさせ給ひ、新古今集の編纂と精撰とに御熱心であらせられたことは、全く異常のことと申しあげねばならぬ。これ偏へに、上皇がこの集をもつて聖世の龜鑑きかんたらしめ、後世に永く仰慕せられむことを冀こひねがはせられたからにほかならぬ。

集の内容と編纂上の特色

上述の如く、新古今集は精撰に精撰を重ねられてゐるので、従つて、その整然たる藝術的排列のもとに詞華の精鍊せられてゐることは、歴代勅撰和歌集中の随一といつてよろしからう。全篇を春上・春下・夏・秋上・秋下・冬・賀・哀傷・離別・羈旅きりよ・戀一・戀二・戀三・戀四・戀五・雜上・雜中・雜下・神祇しんぎ・釋しよく

教の二十卷に分類し、各卷の歌は、内容的には大體季節順に、作者的には古人群と今人群との交互排列になるやうに考慮を加へて排列せられてゐる。但し、戀の部だけには、戀の進行状態による排列順序をも採り入れてゐる。また一首一首の排列順位には緊密な相互の内容的連關を考慮し、それが今もいふとほり實に藝術的な香氣を漂はせてゐることは、風巻景次郎氏のたびたび指摘したところである。そのほか、新古今集には、三十一音の短歌ばかりが収録せられてゐて、長歌や旋頭歌せうづかのやうな雜體ざつたいや、俳諧歌や物名ものなのやうな遊戯的要素をもつた歌等が一首も收められてゐないことが、大きな特色になつてゐる。すべて、かういふ特色は後鳥羽上皇の叡慮に發するのであつて、上皇の御見識がそれらの上にも發現してゐるものと考へられる。

總じて、新古今集の和歌は一度後鳥羽上皇の御鑑識を経たものばかりであり、さらに切り継ぎにおいて上皇の御意に召さぬ歌は切りすてられて、最初に撰者が選進した歌は徹底的に上皇の御選を蒙つたのであり、しかも今日判明してゐるだけでも一割近くの歌が新たに入れかへられてゐる。また、部の立て方や歌の排列の上にも撰者たちは一々上皇の御指圖さしずを仰いでゐるといふ事實がある。撰者たちの自由な權限は、最初に、上皇の勅選材料として古來の和歌を選進したこと、部類開始以後の編纂事務において、詞書ことばかきや作者名の史實に反する點を訂正したり、その文體や表記に統一あらしめるために加筆したりする事務的なこととにのみ限定せられてゐて、およそ歌の出し入れ等に關しては全然裁定權を與へられてゐない。おもふに、

新古今集編纂の上に反映した撰者の志向は極めて微妙であつたといはなければならない。一體、勅撰集といふものは、勅旨によつて指名せられた撰者がその全責任において編纂し、天皇もしくは上皇は直接その事に携はられないのが常例である。もしまた、風雅集の如く例外的に上皇が親撰せられる場合は、撰者が上皇御自身でいらせられるから、特に撰者を選定指名せられることがない。然るに、新古今集の場合は、よほどその趣きを異にしてゐるのであつて、後鳥羽上皇御みづから編纂のことに關與あそばされ、撰者はただ上皇の御手傳ひをしたに過ぎない。いはば、新古今集撰集の殆どの責任は後鳥羽上皇にあるのであつて、撰者には事務助手としての責任しかない。その意味では、新古今集は後鳥羽上皇親撰の歌集だと言つても差し支へがないのである。さればこそ、新古今集の序文は、そのことをはつきりと述べたばかりか、その文も後鳥羽上皇がみづからお書きあそばした體裁になつてゐる。かやうに、新古今集は上皇親撰の集と申してもよろしいものであるにかかはらず、なほ、普通の勅撰集と同様に撰者を設定し、その撰者の名を序文中にも列記してゐるのである。これは異例と言はなければならない。この異例が、新古今集の撰集としての性格や特色を考へる上に非常に大切なのである。

新古今集には撰集方針として、萬葉集の歌は載録するが、古今集以下千載集に至る七代集に出てゐる歌は入れないといふ方針がとられた。また、遺美を廣く求めるといふ方針のもとに、三十六人集や古今和歌六帖や伊勢物語等の古典を廣く涉獵し、平安末期の歌學書に出てゐるやうな人口に膾炙した歌で七代集に

入集してゐない歌はつとめて入集させる傾向があつた。また、歌の排列には季節順といふことが根本的な基準となつてをつた。

なほ、新古今集の編纂に當つては、復古の精神が大きく作用してゐる。たとへば、和漢の兩序を添へられたのは古今集にまなんだのであり、撰者を五人定めたのも古今集や後撰集の先例に復かへらうとしたのである。ところが、かういふ風に古今集の先例に多くを學びながら、また他方では、その内容においては古今集以上に出ようと努めてゐる。切り継ぎの時には、出来るだけ古歌を棄てて当代人の歌を多くしようとせられたこと、また明月記元久二年三月二日の記事によると、各卷の卷頭に古人の歌がありすぎるから、それを當代人の歌と置きかへよとお命じになつてゐること、さういふことによつて、後鳥羽上皇がいかに當代を重んぜられたかを察することが出来る。けだし、この事は、新古今集といふその名のとほり、古今集のあとを追うて更に新しい時代の古今集を作らうといふ後鳥羽上皇の思し召しの一斑を表はすものである。て、竟宴の時の後鳥羽上皇の「いそのかみ古きを今にならべこし昔の跡をまたたづねつつ」といふ御製にも、古今集の古きをたづねて、しかもそれに拮抗して今の新時代を代表する大勅撰集を撰みまさむとする御抱負のほどがうかがはれるのである。

これを要するに、新古今集の現在の如き在り方は、後鳥羽上皇の御詩眼と御趣味とによつて性格づけられてゐると考ふべきである。

傳 本

今日傳はつてゐる新古今和歌集の中で一番製作の新しい歌は、承元二年五月下旬に作られた後鳥羽上皇の住吉御歌合の御製である。この御製は現存のどの本にも入つてゐる。ところが、この御製が新古今集に入れられたのは承元二年六月初めのことらしく推定せられるから、現存の新古今集は、どれもみな承元二年六月以降の改修本の面影を傳へてゐるものであるといふことが出来る。しかし、現存の新古今集は、本によつてその所收歌數に相違がある。これは、主として、改修途上で除きすてられた歌を含んでゐたり、含んでゐなかつたり、或はその含有數が多かつたり少なかつたりするからである。いままでに判明してゐるところでは、後鳥羽上皇が御在京中での最終の改修は承元四年九月のことであるから、結局、承元二年六月以後承元四年十月までの間に除きすてられた歌を含んでゐることの多少が、かういふ風に歌數の相違の生じる主たる原因であると思はれる。われわれは、この除き棄てられた歌を普通に切出歌と呼んでゐるのであるが、寫本によつては、全然この切出歌を含まず、成立の最終段階である千九百七十八首だけを収録した本もある。しかし、それはごく稀れであつて、大抵は何首かの切出歌を含有してゐる。流布の板本にも三首の切出歌がある。切出歌を一番多く有してゐるのは、所謂石津本であつて、十七首の切出歌を含んでゐる。切出歌を本文中に含んでゐる傳本には、切出歌に切出し記號や註記のあるものと、切出し記號